

## 価値観とアイデンティティ

(原文は英語)

アフィナ・リャン (14 歳)

米国カリフォルニア州

キャニオン・クレスト・アカデミー

私が自分の個性に目覚め、世界を違う視点から見るようになったのは14歳になってからだ。現実の世界に少しずつ足を踏み入れるにつれて、それまでの純粋な自分が粉々になっていくのは刺激的で驚きの連続だが、危険でいら立ちを覚えることもある。物事の影響を受けやすい若い年齢だと、自分が誰であるのかを忘れて、集団の中に埋もれてしまいやすい。10代という時期は個人のアイデンティティと世界観を形作るプロセスにおいてとても重要だ。サナギの外に初めて出るのだから知識や経験もない。私にとって自分が大切にする価値観とは、他の人たちと共に学んだりコミュニケーションしたりすることで得られる考えや教訓のようなものだ。まるで自分が未完成のパズルのように、欠けているピースをメディアや家族・友人、本を通じて社会の中から見つけ出してくる必要がある。ただし、正しいピースを見つけ出すには前提条件というか、必須条件がある。心を開くことだ。

中学校に入ると私は初めて人間の多様性と一人一人が持つ物語に気づいた。もし自分が新しい人たちとの出会いに心を開かなければ、今の親友たちとは決して知り合うことはなかっただろう。たとえ考え方が食い違っても、心を開けば物事を新しい視点から見るようになり、機会にも恵まれる。頭から相手を否定しなければ強い絆が生まれ、相手に共感できるようになる。人間はコミュニケーションを取り、何かを共有してはじめて互いを理解することができる。これが私の2番目の価値観へとつながる。相手を否定する前に共感するということだ。共感とは同情や哀れみとはまったく異なり、自分が聞き手になり、相手の身になることをいう。作家のハーバー・リーが『アラバマ物語』(原題: To Kill a Mockingbird、原題直訳: ものまね鳥を殺すには)の中で、共感とは「その人の皮膚の中に入り込みその人の中を歩き回る」ことだと巧みに表現している。心を開くには勇気と自分をさらけ出すことが必要だが、相手を知ろうとする努力も必要だ。そうした障害や恐れを乗り越えることができれば、物語の中でリーが書いたように「深く知れば、たいていの人は(良い人)」であることがわかる。

他人を受け入れて理解すれば、自分なりの価値観や自分自身の一部を作り上げることにつながる。探求するのを拒むということは、無知で偏見を持つことと同じだ。自分の偏見で他人を枠にはめ、個性や共感力を見失ってしまうことがよくある。するとやがて固定概念が出来上がる。その方が人を判断しやすいからだ。共感と受容する心が欠けた社会からは憎しみと誤解が生まれる。極端な例が白人

至上主義を掲げるテロリスト集団でありヘイト集団のKKK（クー・クラックス・クラン）だ。この集団は、特定の人種が他の人種よりも優れていると信じて恐怖と暴力を用いてきた。一方、互いを理解し多様性を受け入れる社会ではチームワークと意識を高めることができる。違いを理由に他人を分別し差別するのではなく、社会はすべての市民を人間として平等に見るべきだ。言葉にすると実現できそうだが、実際に行動に移すのはかなり難しい。人間は完璧ではないからだ。すべての人々のために公平な扱いを求めるということは、場合によっては一部の人の特権をなくすということでもある。今日の社会はそれを実現できるほど完璧ではないが、改善の余地はあるはずだ。

私の人生においては、誰かが何かを言いたいことがあるときは、できる限りその人の言うことに耳を傾けたい。疎外されたり、落ち込んだりする気持ちがどんなものかを私は知っている。だから助けを必要としている人をなぐさめ、せめて寄り添えるように最善を尽くしたい。昔親切な人に助けられたことがある。私はその時の思いやりを誰か他の人たちに与えたい。思いやりと共感誰かの心に小さな変化をもたらし、やがては正義と平等のために闘うような大きな変化をもたらすことができる。

今も世の中を模索している私にとってアイデンティティというパズルは完成してはいない。しかし私はこれからも、新しい人たちとの出会いを通じて意義のあるつながりと知識を身に付けていこう。ネガティブなことに出会うのは決して悪くはないが、ネガティブになるのは良くないことだ。最後にマハトマ・ガンジーの言葉を紹介する。「前向きな習慣を身に付けていよう。その習慣が自分の価値観になるから。前向きな価値観を持ち続けよう。その価値観が自分の運命となるから」